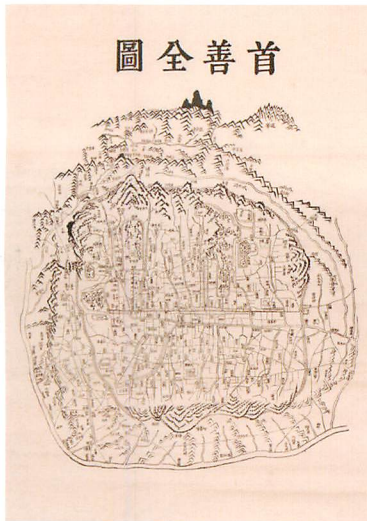


朝鮮時代の 崇礼門

崇礼門は漢陽都城の他の大門と同様、都城への出入りに使われた城門であると同時に、中国の皇帝が送った外交使節を出迎え、外交文書の調書を受け取り、帰る使臣を見送る(餞送)場所とするなど、国の関門としての役割を果たした。また、中国に使臣を送ったり、軍隊を出兵させた時には官僚たちが崇礼門の外で見送るのが習わしだった。英祖(1724～1776)は崇礼門の門楼において罪人を断罪し、正祖(1776～1800)は水原・顯隆園へ出向いた時に崇礼門の周辺に斥候と伏兵を配置した。さらに、純祖(1800～1833)は御陵で葬儀が終わった後、神主(位牌)を崇礼門の外で迎えたという記録が残っていることから、崇礼門が様々な役割をしてきたことが分かる。

城門とその周辺に軍隊を配置し、都城内部の宮殿と民を守ると同時に、通行禁止時間(2更～5更)には城門を閉じて出入りを禁



首善全図(1840年代)

じた。城門を開閉する信号は、鐘や鼓を利用して知らせたが、2更の閉門を人定、5更の開門を罷漏と呼んだ。1425年(世宗7)4月に初めて崇礼門に鐘を吊るしたという記録があり、その後は鐘を鳴らして人定と罷漏を知らせたという記録も1536年(中宗31)、1594年(宣祖27)、1598年(宣祖31)の三回にわたって記されている。



李起龍筆 雨乞耆老會圖(1629年)

雨乞いの祭祀を行った。雨が降ると再び崇礼門を開放し、移された市場を本来の場所に戻した。また市場で鼓を鳴らすことを許すなど本来の状態に戻る。1528年(中宗23)には、春と夏の干ばつとは違って秋の場合は雨乞い祭のみを行い、城門の開閉や鼓を鳴らすことを禁じることは行わないなど、季節に合わせて調整することもあった。

崇礼門の建築 | 崇礼門は花崗岩を高く築いた虹蜺(虹のようなアーチ型)を入り口にして都城に出入りできるようにしており、その上に2階建ての木造建物(門楼)を建てた。2階の門楼には昇り降りできるように東西の両側に石階段を設けた。また門楼の周りに煉瓦塼を巡らせるとともに石階段に接するところに小さな門を設け、門楼への出入り口とした。門楼の下は中央の一間だけ床を張り、他はすべて地面のままにしてある。屋根の降り棟には雉像が、大棟の両端には鳩尾といわれる装飾用瓦がそれぞれ載せられ、厳かな雰囲気을添えている。



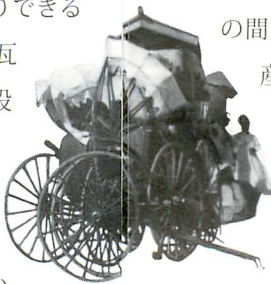
朝鮮通信使 行列図(1636年)

日常的に城門を開閉することの他に、干ばつが続き、雨乞い祭を行う場合、火の方角である南の崇礼門は閉じ、水の方角である北の肅清門は開いた。さらに、市場の位置を移し、鼓は鳴らさないようにするなど、陰陽五行思想に従って、天に

近代の 崇礼門

とする都城の四大門は道路の建設による城壁の撤去及び、都市の拡張に伴う都城の解体などを経て石積みと2階門楼のみの城門になってしまった。

日本により強制的に合併された1910年には、崇礼門の周辺に円形の石積みがつくられ、その周囲に線路や車道が作られた。その後、日本の植民地時代の間、崇礼門は物



崇礼門前の人力車(1905年)

産共進会や博覧会の会場として利用され、1930年代の後半からは虹蜺内部への出入りと接近も禁じられ、崇礼門は周辺道路に囲まれて孤島のように孤立してしまった。

1899年に崇礼門の虹蜺のところを電車が通るようになり、崇礼門は都城の出入りを統制していた本来の機能はもとより、軍事的・儀礼的・思想的機能をすべて失ってしまった。その後、崇礼門をはじめ



崇礼門の前景(1903年)

現代の 崇礼門

1950年の韓国戦争の時は、崇礼門の石積みと門楼が砲弾と銃弾により損傷を受けたので、1953年に緊急修理を行い、1961～1963年に再び石積みの一部と門楼の全体を修理することにより、戦争による損傷をほとんど復旧した。2006年3

月には、ソウル市が崇礼門周辺を公園に造成し、崇礼門を市民に公開した。

建造されて約600年の間、数多くの戦乱と苦難の中でも健在だった崇礼門は、2008年2月10日、放火により門楼の一部が焼失してしまった。残骸に対する精密調査の結果、門楼の2階の90%と1階の10%程度が被害を受けていたことが明らかになった。しかし前もって作成しておいた精密な実測図と写真を活用すれば、門楼の復旧が可能であると判断された。その後、2008年から2009年までの約2年間、精密な実測調査と構造の安全性調査を行い、2010年2月に復旧工事に着工して2013年5月4日に工事を完了した後、一般公開された。



火災前の扁額

火災後の扁額

復旧後の崇礼門 | 火災復旧の過程で確認された幾つかの新事実を復旧工事に反映して、それまでの間違いを修正した。1階屋根の降り棟の雉像を8体から7体にし、大棟の長さを15.7mから16.6mにすると同時に、東の階段の幅を2.9mから5mへと増やした。また、門楼1階の中央間に設置された板の間は、ウムルマル(井の字形に組んで敷いた板間)から長板へと変えられた。また、1907年～1909年の間に壊された城門の左右の城壁のうち、東53m、西16mを復元した。



現在

